南西諸島の特産工芸品開発支援システムの構築

デザイン・工芸部　○恵原要，藤田純一，山田淳人

１．　はじめに

奄美を中心とする南西諸島は，世界自然遺産登録の候補に上がるなど，豊かな自然と多様で特徴的な文化，風土など優れた資源・素材に恵まれている。しかし，現地における特産工芸品や土産品については，食品や大島紬関連の商品を除くと地域独自の物が少なく，多くは県外産に占められ，恵まれた資源・素材が十分活かされていないのが現状である。

現地においては，地域産業の振興に繋がる工芸品の開発など地場産品興しが進められているが，地域的特徴をもった製品の開発について苦慮している。

そこで，特産工芸品や観光土産品の関連企業や団体を支援する目的で，地域の特徴ある製品開発に有効な特産工芸品開発手法を作成し，これを使用した製品開発を試みた。

２．　特産工芸品の開発手引き書の作成

２．１　製品開発要素のデータベース化

まず，製品開発において地域性を特徴づけ，「奄美らしさ」をイメージさせる要素を抽出し，以下によりデータベース化を図った。

・製品開発のためのモチーフ等（奄美地域の自然や文化）の抽出・分類
・製品開発のための奄美の材料（樹種とその利用）の抽出・分類
・奄美地域をイメージする色の抽出・分類　→色相環, トーン, グラデーション
・奄美地域をイメージする形の抽出・分類　→図形の展開（シルエット，パターンの繰り返し）
・奄美地域の特産工芸品のアイテム検討
・奄美の色の活用：パッケージ、販促用・催事用ポスター等のグラフィック系ツール
・奄美の形の活用：シルエットを使用した製品。図形の展開によるグラフィック系ツールへ

２．２　特産工芸品の開発手法活用の流れ

次に，データベースを活用し, 地域らしさを感じさせる特産工芸品の開発手法を検討した。

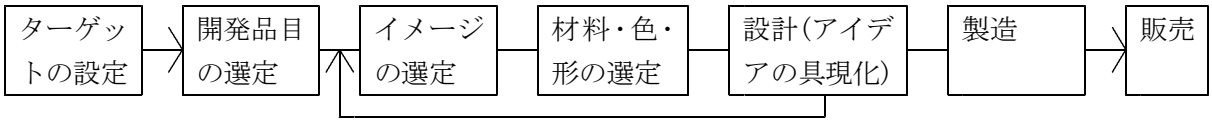

図１　開発手法活用の流れ図（例）

３．　製品開発

製品開発に当たっては，商品化を前提に考え, 関連団体との連携を図りながら進めた。対象業種として「奄美木工の里事業」に取り組むなど関連団体の環境が整いつつある木工芸関連品について検討することとした。また，奄美群島全域をまるごと博物館に見立て，奄美の宝（群島の魅力や資源）を生かすとともに，地域潜在力を引き出し, 持続可能な地域振興の取組を展開するという「奄美ミュージアム構想」（奄美群島広域事務組合・2004年策定）との連携を図り，幾つかの提案型試作を行った。これらは，幼児，学童を主たる対象ととらえ, 奄美群島を意識させるとともに知的学習効果を高める製品として提案した。以下に，試作品の幾つかを紹介する。

1)沖縄も含め，広く南西諸島に伝わるサバニ型の手漕ぎ漁船の組立キット（図２)。縮尺1:20
2)奄美の自然（海，太陽）を彷彿とさせる色をテーマとしたキーホルダー（図３)。本体は，奄美に自生する様々な樹種から選定した木材を使用する。
3)楽しみながら，形の違いを認識するトレーニングにつながる奄美群島の動物のパズル(図４)。購入者がカービング（削り）や彩色を施して仕上げる商品とする。
4)奄美諸島の行政区分地図パズル（図５)。ＣＤケースにパッケージングされた縮尺1：50万のものと30cm角の縮尺1：20万の２種。高い精度が必要なため，炭酸ガスレーザ加工機により作成する。

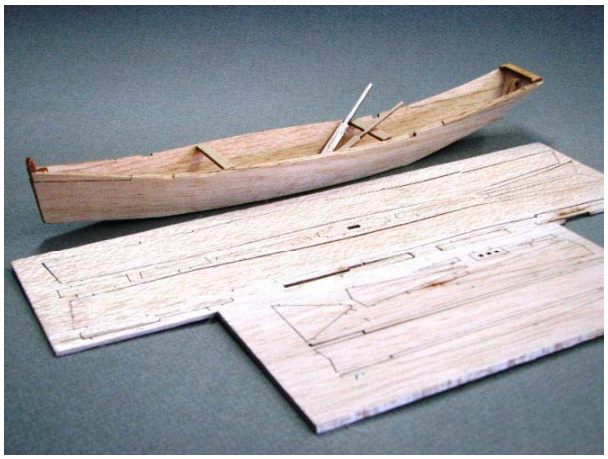

図２　奄美伝統木造船のミニチュアキット

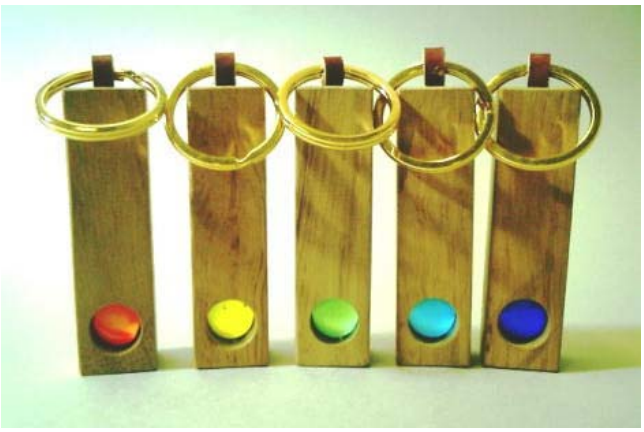

図３　奄美産木材のキーホルダー

図４　熱帯魚のパズル

図５　奄美諸島地図パズル

４．　おわりに

奄美のような特徴ある自然や文化を有する地域においては，製品やパッケージにその地域性を表現することは,特徴ある製品の開発に有効である。しかし,奄美を特徴づける素材の収集には,量的に限界があるため,web上の関連サイトのリンクを張ることで利便性を図った。しかし利用には制約があるため,利用者は独自に素材を追加するなど,環境を自身で整備することを前提に作成した。これにより,作成した手引き書は,一つのひな形とも言うべき物として提案できた。